

学位授与番号	医博甲第1360号
学位授与年月日	平成11年3月25日
氏名	窪田善之
学位論文題目	顎関節円板整位術の有用性に関する実験的研究

論文審査委員	主査	教授	山本悦秀
	副査	教授	富田勝郎
		教授	古川 仍

内容の要旨及び審査の結果の要旨

顎関節の疼痛、雑音および開口障害を主症状とする顎関節症の病態形成には顎関節円板の主に前方への転位が最も関与するとされているが、この位置異常が顎関節にどのような器質的变化を惹起し、また臨床で行われている円板整位術がその変化から修復させ得るのかどうかについては不明な点が少なくない。そこで本研究では独自に考案した円板前方転位モデルを用い、円板前方牽引による顎関節の変化ならびに円板復位による組織修復の様相を観察する目的で実験を行い、円板整位術の有用性について検討した。実験には日本白色種家兎58羽を用い、円板前方牽引モデルは皮膚切開によって左側の上関節腔を開放、明示された円板後方に縫合糸を掛けて7mm前方に牽引し、骨穿孔部に縫合固定することにより作成した。その後、経過観察を続けたものを牽引群、牽引処置2週目または3週目に牽引を解除し、復位させたものを整位群とし、術後2-40週まで肉眼的ならびに組織学的観察を行った。得られた結果は以下のように要約される。

- 1) 牽引群の下顎関節表面の肉眼的所見では、2週目で光沢の低下、5週目以降で表面粗糙となっていた。また垂直方向からの関節面の面積計測では40週までに常に手術側が健側より上回っていた。
- 2) 牽引群の顎関節の矢状方向での組織学的所見では、2週目で関節軟骨層部の増殖、3週目でクラスター形成等の初期退行性変化、5週目で円板後方の穿孔および同部位に一致する下顎頭軟骨下骨層の露出、8週目で円板の消失、下顎頭および関節結節の平坦化の促進が認められ、24週でも同様の所見であった。
- 3) 2週目整位群の組織学的所見では下顎頭軟骨層に軽度の形態変化が見られたが、牽引群のような円板穿孔等の強い退行性変化は認められなかった。
- 4) 3週目整位群の組織学的所見では、牽引群と同様に関節構成組織の退行性変化が進行し、8週目で関節円板の消失、関節結節および下顎頭の平坦化の促進、軟骨下骨層の露出が認められ、24週でも同様の所見であった。なお上関節腔開放処置自体の顎関節への影響は、非開放例と差がなく本研究では否定し得た。

以上、本研究では顎関節円板前方転位による退行性変化およびそれに対する円板整位術の有用性と限界を実験的に明らかにした点で顎関節外科学に寄与する価値ある論文と評価された。